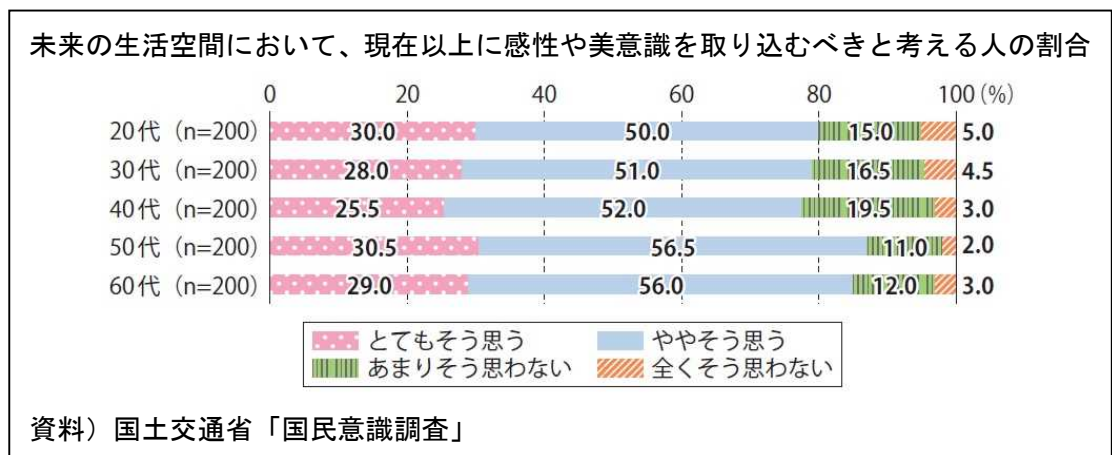


令和元年版国土交通白書 インタビュー（(株)足利フラワーリゾート）

「花のある風景」（白書第1部第1章掲載）について、(株)足利フラワーリゾート代表取締役の早川氏にお話を伺った。

まずは、令和元年版国土交通白書に対する率直なご感想をお聞かせください。

早川氏：これから世界的に技術革新が進む中で、日本が生き残る上ではこの国の繊細な感性を打ち出していく必要があると思います。その点で「感性」という部分に目を向けていただいて記述されていることはシンプルに良いと感じました。また、便利さや技術革新も重要ですが、この国の良さ、歴史や文化を守っていくことも必要だと思います。アンケートでは全世代で8割程度の方が美意識を取り込むべきと考えているという結果が出ていますが、実態は若い人の意識は薄らいでいると感じます。いかに若い世代の意識向上を図っていくかが課題であり、重要なことだと思います。



国土交通白書では、古来より日本人は梅や桜の花等の鑑賞を愛好し、近年は様々な花の咲き乱れる風景が「絶景」として話題となっていることを取り上げています。藤の花の美しさから大きな注目を集めるようになった「あしかがフラワーパーク」はどのように誕生したのでしょうか。

早川氏：私の祖父が「早川農園」として現在の場所から離れた市街地に作った施設が前身で、当初はビジネスではなく地域の人たちが藤の花を楽しむための憩いの場でした。25年前の都市開発がきっかけで、現在の足利市迫間町へ移転することとなりました。シンボルである藤の木は当時 600 m²ありましたが、約2年かけてトレーラーに乗せて運搬できる大きさの 72 m²まで根を切り詰めました。藤の木は柔らかく釣り上げると折れてしまうリスクがあったため、幹にギブスや石膏を巻き負荷に耐えられるようにして、20kmの距離を1時間かけて慎重に移動し、移植をしました。移転の作業では、花の活力を高めるために早川農園にあ

った土を持ってきたり、250 トンを超える炭を入れたり、日照の角度も早川農園にあった当時を再現するように設置するなど、約 2,000 人の職人さんの力を借りたプロジェクトで、テレビでも生中継されました。今では、藤棚の面積が 1,000 m²を超えるまでに成長しています。

「あしかがフラワーパーク」の藤の花

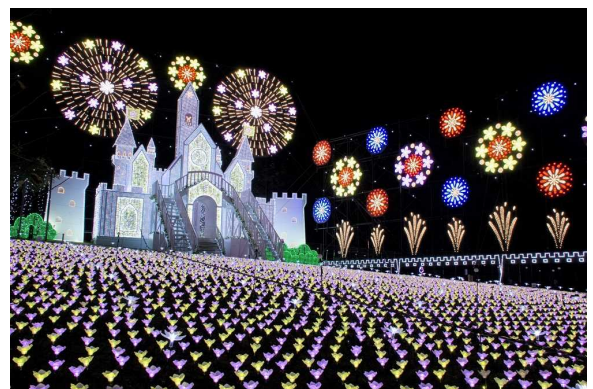


資料) (株)足利フラワーリゾート

「あしかがフラワーパーク」の見どころやおすすめのスポットについてお聞かせください。

早川氏 : ビジネスモデルとしては藤の花をシンボルとしていますが、他に秋・冬のイルミネーションも柱としています。長崎のハウステンボス、札幌のホワイトイルミネーションと並んで日本三大イルミネーションに認定いただきました。イルミネーションランキングでも3年連続で1位となり、3ヶ月強で約70万人の方に来ていただいています。イルミネーションの特徴は、プログラミングから設置まで全てがスタッフの手作りという点で、「花のプロフェッショナルが作る光の花」という呼び方をしています。また、花が少ない時期でもいかに美しい光の花を咲かせるかを意識してスタッフが作り上げています。これからは国内の需要が厳しくなる中、求められるのは量よりも質で、強い個性や他では真似のできない質の高さを持っていることが重要だと思います。また、新たにバラを育てていて、藤・イルミネーションと併せ三本柱として作り上げています。植物園の課題としては来客数の季節変動値が高く、一つのテーマに依存する怖さがあるため、いかに年間の中で柱となるコンテンツを育てるかを意識してきました。

イルミネーション「光の花の庭」



資料) (株)足利フラワーリゾート

2014 年には米国 CNN の「世界の夢の旅行先 10 か所」として紹介をされましたが、この反響はいかがでしたか。

早川氏 : 当初は海外よりも国内でインパクトがありました。日本で唯一選ばれたことで、各テレビ局に取り上げていただき、日本人のお客様が来てくれるきっかけとなりました。当時は東日本大震災から来客数がなかなか回復できなかった時期でしたので、タイミングにも恵まれました。その後、日本人が注目するスポットがある、ということで海外からも注目を集めることとなりました。国内の人は雨が降っていると外出を控えてしまいがちですが、海外の人は限られた日数しか滞在しないため雨が降っていても観光地に来てくれます。こうした天候リスクの緩和も狙いとしてインバウンドに力を入れています。外国人の来客数は6年前には年間で5,000人ほどでしたが、今では30万人まで増えています。国土交通白書にも載せていただいたように、SNSでの口コミの恩恵も非常に大きく、自分たちが発信する以上に強い反響でした。

本日は、色々とお話をお聞かせいただきましてありがとうございました。最後に、今後の国土交通行政に期待することなどありましたら、お聞かせください。

早川氏 : 行政が行う補助制度には使いづらさを感じます。ものづくり産業に対しては手厚いと思いますが、観光・サービス業に対しては、仕組みはあっても使い勝手の良いものが少ないと感じます。園内のハード整備をする上で、サービス産業向けの補助制度を利用しやすくしてほしいと思います。あとは、地方の二次交通の対策が必要だと思います。JR 両毛線の「あしかがフラワーパーク駅」ができ、インフラの整備は進んでいますが、地方の二次交通等の移動手段の整備は遅れていると思います。車離れが進んでいる中、地域としてせっかく魅力があっても、交通の整備が遅れていると移動手段がないため行けません。例えば、あしかがフラワーパークには来ても、他のところへは行けず、すぐに東京に戻ってしまう人が多いです。一定のルールは必要ですが、路線バスを週末だけ観光バスとして使えるようにするなど、あるものを柔軟に活用していくべきではないかと思っています。

2018年4月に開業した、JR 両毛線
「あしかがフラワーパーク駅」



資料) (株)足利フラワーリゾート

「令和元年版国土交通白書」

<http://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h30/index.html>

インタビューにご協力いただきまして、ありがとうございました！

(株)足利フラワーリゾート

代表取締役社長 早川 公一郎 氏

